

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380701

研究課題名(和文)「信頼感」の実証的国際比較研究

研究課題名(英文) A Cross-national Study of Trust-Emerical Approach

研究代表者

佐々木 正道 (Sasaki, Masamichi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・名誉教授

研究者番号：30142326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：「信頼感」の形成過程の初期の段階での前提要因として、米国、ドイツ、フィンランド、チェコ、日本、台湾では名声と人的ネットワーク、そしてロシアとトルコでは獲得的地位と同郷・同窓が重視されることが明らかとなり、先行研究の一部の理論が支持された。そして、3都市(上海、ソウル、東京)において信頼構造の共通性の有無について検証を行った結果、「信頼感」と属性(性別、年齢、学歴)、一部の性格特性、人的ネットワークとの関連について共通性が認められた。2017年11月に31カ国121名の研究者が集い、「信頼感」の国際会議が催され、その成果を専門誌に掲載した。また研究代表者は編著書に本研究成果の一部を収録した。

研究成果の概要(英文)：Criteria for judging the trustworthiness of others before a first meeting are fame and personal network for the U.S. and Europe (i.e., Germany, Finland, Czech Republic) and Asia (Japan and Taiwan), and high achieved status and the same school or birthplace for Russia and Turkey, both of which partially support previous theories. To determine whether three major urbanized cities (i.e., Shanghai, Seoul, and Tokyo) share common trust structures, commonalities were found among the three cities for the relationships between trust and social characteristics (gender, age, and education), personal networks, and some personality characteristics. Finally, 121 trust researchers from 31 nations gathered in Tokyo in 2017 to participate in an international conference on trust. A special issue of "Comparative Sociology" stemmed from the conference. The principal investigator also edited a book entitled "Trust in Contemporary Society" describing the results of the project.

研究分野：社会学

キーワード：trust cross-national study seven nations & Taiwan mega-cities in Asia

1. 研究開始当初の背景

「信頼」は多くの社会科学の理論家に研究の対象として議論されてきた。ところが実証的裏付けのない理論的論争が中心であり、1990年代ごろから「信頼」に関する実証的研究論文が、多岐の分野にわたって、主に欧米において多く発表されるようになった。しかし日本では、主に社会心理学の分野で近年行われるようになってきたものの、社会学においては実証的調査データに基づく国際比較研究はほとんど手付かずの状態である。

我々は基盤研究（A）（平成19年度～21年度）並びに基盤研究（B）（平成22年度～25年度）により「信頼感」を多次元的に捉え、既に7カ国（日本、米国、ロシア、フィンランド、ドイツ、チェコ、トルコ）および台湾において、「信頼感」についての意識調査を実施し、新たに「信頼感」尺度を作成し、「信頼感」に関連する属性並びに意識構造の共通の特徴と特異性などについて研究成果を上げてきた。

2. 研究の目的

- 1) 「信頼感」の高いレベルの1カ国としてフィンランドを選択したが、高レベルの国家間の比較を可能にするため、新たにノルウェーを加え調査を実施する。
- 2) これまで調査を実施した7カ国および台湾そこにノルウェーを加えた総合的分析を「信頼感」が同レベル（高・中・低）の国家間で体系的比較分析を行い、「信頼感」の形成過程、特に初期の段階で形成される前提要因を解明する。
- 3) 国際会議を開催し、我々の研究成果と最近の「信頼感」研究の議論などを踏まえ社会学の専門誌 *Comparative Sociology* で「信頼感」の特別号として刊行、並びに

『Trust in Contemporary Society』を上梓する。

- 4) 「信頼」に関する諸理論、社会変動論、近代化一脱（または再帰的）近代化論、収斂理論、グローバリゼーションなどの社会科学の諸理論を踏まえ、新たな理論構築のための検証可能なモデルを設定し検証する。

3. 研究の方法

これまで我々が実施した「信頼感」についての意識調査データを使用し、主にコレスポネンズ分析を行う。

4. 研究成果

次の4項目である。

①これまで我々が行った調査研究では、「信頼感」が低レベルの国はロシアとトルコの2カ国、中レベルの国は日本、米国、ドイツ、チェコの4カ国および台湾、そして、高レベルの国はフィンランドの1カ国であることが明らかとなった。本研究では、高レベルの国についての比較を可能にするため、新たにノルウェー（World Values Surveyによると高レベルにランクされている）を加え、これまでの7カ国および台湾そこにノルウェーを加えた総合的分析を行う。そこでは「信頼感」が同レベル（高・中・低）の国についての体系的比較分析を、「信頼感」の形成過程、特に初期の段階で形成される前提要因について類似点と相違点の解明を試みた。なお、ノルウェーについては調査機関（IPSOS）に委託してオムニバス方式により調査を行ったが、調査経費が予想より高額となり質問項目を削減せざるを得ず、他の7カ国および台湾との比較分析に制約があった。そこで、主に7カ国（日本、米国、ロシア、フィンランド、ドイツ、チェコ、トルコ）および台湾間において「信頼感」と先行研究によって信頼の前提となると捉えられてきた9つの要因の関連性について多次元コレスポネンズ分析を行った。その結果、1) 前提要因の「友人の紹介」が4カ国（アメリ

カ、日本、トルコ、ロシア) および台湾において最も高い割合を占めた。従って、P.シュトンプカ (Sztompka) の述べている“重要な他者”などからの情報や紹介により信頼は伝播する点がある程度支持された。2) 信頼の前提要因は7カ国および台湾において、3つのクラスター (A、B、C) を形成していることが明らかとなった。つまり、Aは名声と人的ネットワーク、Bは高い獲得的地位、Cは同郷・同窓である。そして、AがBとCと比べ、各国とも高い割合を占めている。K.クック (Cook) らは、信頼できるか否かの判断を、ステレオタイプに基づいて行う場合があることを明らかにしているが、BとCはこれを支持している。また、Cの同郷・同窓に関して、人々は類似の要因を持つ人を信頼し、持たない人を信頼しない傾向があるという先行研究が支持された。3) 各国とクラスターとの関係は、国別の信頼の低、中、高に幾分対応している。従って、信頼の前提要因として、欧米とアジアでは名声と人的ネットワーク、ロシアとトルコでは獲得的地位と同郷・同窓を重視する。このことは、P.シュトンプカの[社会的地位・威信の階層が急勾配の伝統的、エリート層の支配する社会では、肩書、資格などを信頼の上位に位置付け、より民主的で平等な社会では、大衆からの人気の高さやメディアでの露出度などが重視される]をある程度支持している。信頼の前提要因と年齢との関連は、5カ国 (アメリカ、日本、ドイツ、チェコ、フィンランド) および台湾で若年齢層 (20-49歳) が名声・人的ネットワーク要因を重視し、5カ国 (アメリカ、ドイツ、チェコ、トルコ、フィンランド) で高齢層 (50歳以上) が高い獲得的地位、そして2カ国 (日本とチェコ) および台湾では、同郷・同窓要因を重視している。

②社会科学の理論構築に向けて、モデルを作成し検証した結果、「信頼感」について調査対象国となった7カ国および台湾に関して収斂理論が適用できることが、本研究結果から明らかとなった。さらにグローバル化に伴

い人口が集中する大都市においても他の既存の理論が適用できるかどうかについて、吉野研究分担者が2010年から2012年にかけて実施した「環太平洋価値観国際比較調査」のデータの中から、アジアの大都市である上海、ソウル、東京のサンプルを抽出したデータを用いて比較分析を行った。その結果、信頼感の構造に共通性が認められた。また、パーソナリティの1つの楽観主義、幸福感、パーソナルネットワーク、属性 (年齢、性別、学歴) のすべてが、3都市において信頼感と関連していることが明らかとなった。この共通性は、都市化、近代化、グローバル化などによって、もたらされた収斂による大都市の特徴なのか、それとも共通に埋め込まれた伝統的文化的規範や社会的価値観などによるものなのかどうかを解明することは今後の研究結果を待ちたい。

③「信頼感」に関連する国内外の諸機関 (内閣府政府広報室、NHK、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、博報堂、ミシガン大学の ICPSR、Roper Center 等) で1978年以降実施された世論調査結果をまとめた資料集を刊行した。

④中央大学社会科学研究所主催により、2017年11月18日から21日まで世界31カ国から121名の研究者が集い、「信頼感」に関する研究の国際会議が開催された。全体会議では15の講演・論文発表と32の分科会で85の論文発表が行われた。その初日の全体会議では、社会学の重鎮である P.シュトンプカ (ポーランドヤギェウォ大学教授/元世界社会学会会長) のビデオによる基調講演、経済学・社会哲学で世界的に著名な B. ノートブーム (オランダティルブルフ大学教授) の講演、そして R.バッチマン (ロンドン大学「信頼」研究所所長) の講演が行われた。2日目の全体会議では、「信頼研究の現状」、「対人関係の信頼と適応」、「ネットワーク分析」、「中国を事例とした社会的・経済的近代化」、「1989年後のチェコ共和国におけ

る、市民参加、民主主義の正当性と信頼」について発表が行われた。3日目の全体会議では、「対人関係における不信」、「アジアの視点から見た中国における信頼」、「ロシアにおける家庭での社会化とその変容」、「英国のメンタルヘルスにおける信頼」、「公共における信頼の新たなアプローチ」、「自発性としての信頼」について発表が行われた。3日間の分科会では、多岐にわたる研究テーマで信頼との関わりについて発表が行われた。本国際会議の特筆すべき事は、5大陸31カ国から社会科学の多岐にわたる専門分野の研究者が一堂に会して信頼に関する研究発表を行ったおそらく初めての国際会議であった点である。本会議の参加者からは、会議に対し称賛のコメントが多く寄せられた。本国際会議の成果は、会議発表収録集 (abstract) と社会学の専門誌 *Comparative Sociology* で「信頼感」の特集号として発行した。また、研究代表者は編著書 *Trust in Contemporary Society* を上梓し、当該年度の研究成果の一部を収録した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

1. 佐々木正道、対人関係における信頼の前提要因の国際比較研究、『中央大学社会科学研究所年報』、21号、2017, 141-163.
2. Masamichi Sasaki, A Comparative Analysis of Trust among Megacities - The case of Shanghai, Seoul, and Tokyo, *Development and Society*, 45, 2016, 503-536.
3. 芝井清久・佐々木正道、民主主義制度の発展度と国民性の関連性、『中央大学社会学・社会情報学』、26, 2016, 81-102.
4. Masamichi Sasaki and Tadashi Saito, Measurement of General Trust: A

Cross-National Analysis, 『中央大学社会科学研究所年報』、19号、2015, 47-64.

5. Ryozo Yoshino, K. Shibai, K. Nikaido & T. Fujita, The Asia-Pacific Values Survey 2010-2014. *Behaviometrica*, 査読有、vol. 42, 2015, 99-130.
6. Ryozo Yoshino, Trust of Nations: Looking for More Universal Values for Interpersonal and International Relations, *Behaviometrica*, 査読有、vol. 42, 2015, 131-166.

[学会発表] (計 7 件)

1. 吉野諒三 Cultural Manifold Analysis (CULMAN): Trust of Nations
2017年11月19日
International Conference on Trust
中央大学駿河台記念講堂
2. 吉野諒三・角田ひろ子 調査における中間回答の意味 2017年9月3日
日本行動計量学会
慶応義塾大学産業研究所
3. 吉野諒三 The Longitudinal & Cross-National Value Survey: Cultural Manifold Analysis of National Character 2017年8月7日
IFCS(国際分類学会) 国際大会 東海大学高輪キャンパス
4. 吉野諒三 国際比較調査のデータ収集と解析における注意
2017年 専修大学国際比較調査研究会
専修大学
5. 吉野諒三 Longitudinal & Cross-National Comparative Surveys by the ISM 2017年6月24日 アジア政治経済学会(JAAS)(国際学会) 一橋大学
6. 佐々木正道 Social Trust: Six Approaches of the Analysis

信頼に関する日中比較研究ワークショップ
2016年3月29日 兵庫教育大学ハーバーラ
ンドキャンパス

7. 佐々木正道 Social Trust: Current
Status of Cross-National Studies
「信頼性」の国際比較コンファレンス 2016
年3月18日 中央大学社会科学研究所

[図書] (計 5 件)

1. 佐々木正道・吉野諒三・矢野善郎編、『現代社会の信頼感』、中央大学出版部、2018.
2. 石川晃弘・佐々木正道・ニコライ・ドリャ
フロフ編、『ロシア社会の信頼感』、ヘーベ
スト社、2017.
3. 石川晃弘・佐々木正道・リュボミール・フ
アルチャン編、『グローバル化と地域社会
の変容』、中央大学出版部、2016.
4. 安野智子編、『民意と社会』、中央大学出
版部、2016.
5. 稲葉陽二・吉野諒三編、『ソーシャル・キ
ャピタルの世界—学術的有効性・政策的含
意と統計・解析手法の検証』ミネルヴァ書
房、2016.

[その他]

ホームページ等

2017年11月開催の国際会議について

<http://www.chuo->

[u.ac.jp/research/institutes/socialsciences/ne](http://www.chuo-u.ac.jp/research/institutes/socialsciences/news/2017/12/64242/)

[ws/2017/12/64242/](http://www.chuo-u.ac.jp/research/institutes/socialsciences/news/2017/12/64242/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木正道 (SASAKI, Masamichi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・

名誉教授

研究者番号：30142326

(2) 研究分担者

吉野諒三 (YOSHINO, Ryozo)

統計数理研究所・調査科学研究センター

センター長・教授

研究者番号：60220711

(3) 研究分担者

安野智子 (YASUNO, Satoko)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：60314895

(4) 研究分担者

矢野善郎 (YANO, Yoshiro)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：70282548

(5) 研究分担者

森秀樹 (MORI, Hideki)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：00274027

(6) 研究協力者

石川晃弘 (ISHIKAWA, Akihiro)

(7) 研究協力者

林 文 (HAYASHI, Fumi)